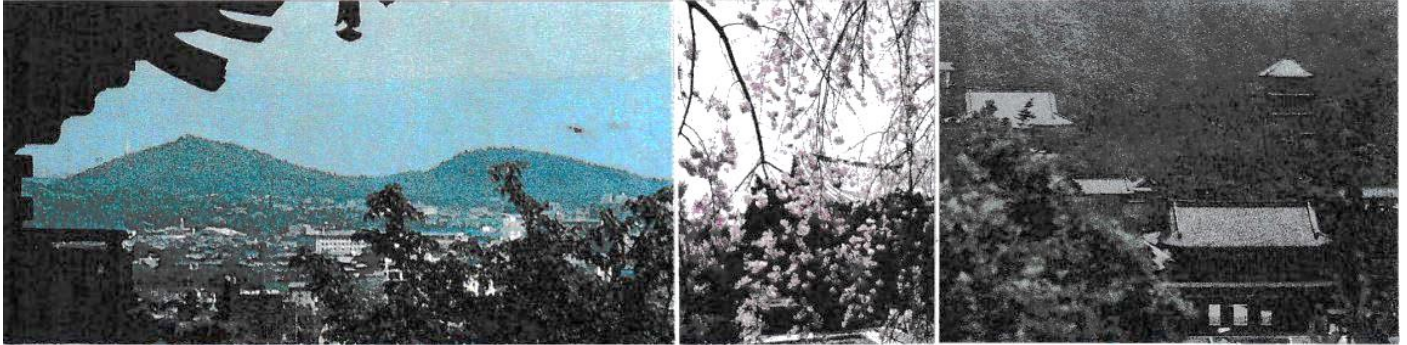


“兼好法師”^{ゆかり}所縁の＜双ヶ丘＞^{をらび}境界徒然^{つれづれ}漫步
2022年4月5日(火)

契りおく 花とならびの 丘のへに 哀れ幾世の 春をすぐさむ

吉田兼好

生前、双ヶ丘の辺りに墓を作り、「死後も共に過ごそう」と傍らに桜を植えた、と。果たして自分はあと何年、この桜を観られることか！？



古都の叢の波に浮かぶ双ヶ丘

法金剛院・待賢門院桜 双ヶ丘山頂から望む仁和寺の佇まい

御室仁和寺の南大門から真っ直ぐ南に下る。直ぐに京福電鉄「御室」駅に突き当たる。その「御室」駅を左に踏切を渡ると、目の前に^{なみ}嬌やかな緑の丘が現れる。双ヶ丘の名の由来は、三つの丘が北から南へと一直線に連なっていることにある。今では叢の波が麓まで押し寄せていて、双ヶ丘は恰も瀬戸内の海に浮かぶ小島の佇まいを古都に漂わせている。

三つの丘の内最も高いのが一ノ丘(海拔116m)。その山頂には、平安時代初期、桓武から仁明まで五代の天皇に仕え、従二位右大臣となった清原夏野の墓がある。

双ヶ丘は眺望がよく、都の雑踏から離れた閑静の地なので、自然を慈しみ詩歌を詠む人々の別荘地、隠棲地ともなっていた。清原夏野が山荘(法金剛院の前身)を構え、兼好法師が庵を結んで思索に耽ったのも、そうした双ヶ丘の恵まれた環境と深く結びついている。

若い頃から禁裏に出仕していた吉田兼好は、30代で出家し、洛北・修学院や比叡山・横川に隠棲したが、後に洛西・双ヶ丘に庵を結んで閑居したと伝えられる。兼好法師の隠棲地は二ノ丘西麓で、此処で精力的な文筆活動に没頭するのである。「つれづれなるままに、日暮し、硯に向かいて……」で始まるあの『徒然草』は、法師48～9歳の頃の作と伝えられている。

水先案内人：牧 彰(会員)

.....

○参集地：JR「茨木」駅改札口8時30分

○順 路：「茨木」⇒「花園」～法金剛院(※妙心寺退蔵院)～花園西陵～長泉寺～つれづれの道(こもればのひろば・はなみのひろば)～双ヶ丘(とおみのひろば・一号墳)～こもればのひろば～昼食(御室「佐近」13:30～)「御室仁和寺」駅⇒「四条大宮」⇒阪急「茨木市」

※コロナ禍で法金剛院拝観不可の場合は、妙心寺退蔵院とする。

○拝観料：法金剛院(待賢門院桜)600円 ※妙心寺退蔵院(紅八重枝垂れ桜・瓢鮎図)600円

○昼の宴：京都・御室「佐近」京都市右京区御室小松野町25-37 ☎075-463-5582

京懐石とフランス料理をコラボした和洋折衷料理(さくらコース5,000円)

○参加費：無料(会員外は資料代100円) ※会員には、会より1,000円の補助あり。

○定 員：約25名

○申込先：「街ing いばらき」代表・阪田浩(080-1436-9881) 会員外の参加大歓迎

Tel&Fax/072-627-3480 [E-mail/ibarakisakata@crux.ocn.ne.jp](mailto:ibarakisakata@crux.ocn.ne.jp)

※本会行事は、自由参加です。不測の事故・傷害などは、自己責任でご対応ください。